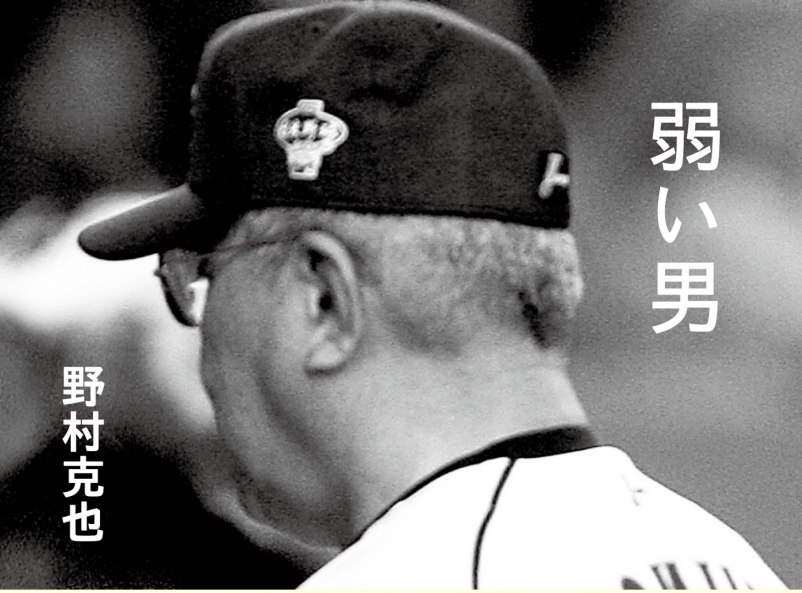


弱い男

野村克也

救いようのない酷薄な死の直前の述懐のみを手に、一度は出版を断念することも検討しました。しかし、野村さんが己の弱さを噛みしめて口にされた言葉の数々は、「老い」「孤独」「弱さ」に向き合って野村さんが生きてきた軌跡であることに間違いありません。その10時間に及ぶ貴重な音源を秘蔵にしてはならないとの思いに至りました。

弱い男

野村克也

星海社

173

SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

星海社編集部　丸茂智晴

本書の企画は、「男の弱さ」をテーマに野村克也さんへインタビューすることから始まりました。

インタビューを開始したのは、２０１９年12月。野村さんが最愛のひと・沙知代さんを亡くされてからすでに2年が経過していました。人生の先達として「男の弱さ」とは何か、そしてその弱さを抱えてなお生き続けるにはどうすればよいのか、その人生を振り返りながら野村さんにご指南いただく本を刊行するべく臨んだインタビューでした。

世間の多くの方と同様に、野村さんは私のなかで長らく「テレビの中の人」でした。平成生まれの私は、野村さんの野球選手としての現役時代をリアルタイムで見ることは当然なく、東北楽天ゴールデンイーグルス監督として憮然（ぶぜん）とした表情で時折微笑みながらユーモアあるぼやきの数々を口にする、そんな泰然としたイメージを抱いていました。「強い

男」である野村さんに「男の弱さ」を語っていただこう、そんな気持ちでいたのです。

ですが、初めてお目にかかった野村さんは――失礼を承知で表現すれば――やるせない孤独に包まれた「弱い男」でした。インタビューで野村さんが口にされた言葉からは、ことごとく生きることへの前向きな意志が喪(うしな)われていたのです。

「今ではいつ死んでもいいと考えている。もうこれ以上長生きしたいとは思わない」

そう言われ、想定していたテーマは瓦解(がかい)しました。「まだまだ人生いいことがきっとありますよ」と、おためごかしでも言うべきだったのかもしれません。けれど、あまりにも重々しく、生きていることの空虚さをぼやく野村さんに、かける言葉は見つかりませんでした。

野村さんが人生で噛みしめてきた「男の弱さ」を語っていただくばかりのインタビューは、２０２０年の1月へ続きました。ついに生きることへの希望を一言も口にされないまま、野村さんの幼少から現在への振り返りは終わってしまい、インタビューはそこで一区切りとなりました。

そして２０２０年2月11日、野村克也さんがご逝去されました。

抜け殻のような野村さんと向かい合いながらも、こんなにもすぐに亡くなられてしまうとは思っていませんでした。生きることへの希望を考える最後のインタビューに臨むこと

で、本書の取材は完了するはずでした。残されたのは、悲観的で諦観に満ちた言葉だけ。救いようのない酷薄な死の直前の述懐のみを手に、一度は出版を断念することも検討しました。しかし、野村さんが己の弱さを噛みしめて口にされた言葉の数々は、「老い」「孤独」「弱さ」に向き合って野村さんが生きてきた軌跡であることに間違いありません。その10時間におよぶ貴重な音源を秘蔵にしてはならないとの思いから再度の書籍化を目指しました。逝去から一年という時間が経過してしまいましたが、野村さんの事務所のご協力があって本書の刊行に至りました。

野村克也さんの死の直前の言葉が、本書には赤裸々に綴られています。

野村さんが人生の終幕に抱えていた「男の弱さ」の耐え難き重さの一片を、読者のみなさまに受け取っていただけることを願ってやみません。

目次

はじめに 3

第一章 私は弱い 13

沙知代が逝ってからの空虚な日々 14
町でいちばんの極貧家庭に生まれて…… 18
イジメ、そして登校拒否の小学生時代 20
甲子園とは無縁の無名プレイヤー 23
「蜘蛛の糸」をつかんで合格した南海ホークス 28

泣き落とし作戦でクビを免れた1年目 30
ライバルの失敗を願う心の弱さ 33
「日本一監督」になってからも弱さは変わらなかった 36
沙知代亡き後、前向きな思いが失われてしまった 40

第二章 母は強い 43

3歳のときに父が亡くなり、母は戦争未亡人に 44
苦労がたたって二度もがんになった母 46
ヤミ米を背負って帰った「あの日」のこと 49
ツツジの花蜜をおやつ代わりにしていた 53
泣きながら、母ちゃんに殴られた 55
明治生まれの女は強い 59
母ちゃんとの永遠の別れ…… 62

背番号《19》を受け継いだ甲斐拓也もまた母子家庭だった 64
母ちゃんこそ、月見草だった 65
生涯、働きづめだった母ちゃん 69

第三章 父は弱い 71

「克則が誘拐された？」 72
克則誘拐騒動、その顛末 76
「放任主義」と「ほったらかし」の大きな違い 78
「王さんとパパと、どちらが偉いの？」 80
子どもの頼みを断ることができない「父の弱さ」 84
父と息子の二人三脚だった「港東ムース」時代 86
堀越高校で甲子園出場はならなかったけれど…… 90
「お前じゃ無理だ。会社勤めで安定した仕事をしろ」 93

「父と子」の関係から、「監督と選手」の関係に 96
現役生活11年間、克則のプロ野球人生 99
「野村克也の息子」の呪縛とともに 102
何もできなかった「父の弱さ」を痛感しつつ…… 103

第四章 妻は強い 107

沙知代との出会い 108
「なんとかなるわよ」は勇気の出る魔法の言葉 110
生涯のベストパートナー 115
理想の夫婦とはどんなものなのだろう？ 118
サッチー騒動の渦中で考えていたこと 121
沙知代と一生添い遂げる覚悟と決意 124
突然の沙知代の死…… 127

「大丈夫よ」が、沙知代の最期の言葉 129
「家には体温がある」と初めて知った 131

第五章 老人は弱い 137

2020年正月、何もない普通の日々 138
人間は理想をなくしたときに老いるのだ 141
理想の老い方とは、はたして？ 145
物欲も、性欲も、消えていく…… 148
趣味のない老人の唯一の趣味 151
子どもや孫の成長が楽しめない 153
いつも「死」のことばかり考えている 155
沙知代が亡くなっても、涙は出なかった 157
「強い妻」に先立たれた「弱い夫」として生きる日々 160

「死んで見守る」よりも、ただ生きていてくれた方がいい 162
もう十分に生きたし、幸せな人生だった 164

おわりに 168

構成者あとがき 171

第一章

私は弱い

沙知代が逝ってからの空虚な日々

男は弱い――。

２０１７（平成29）年12月８日、妻が突然逝った。

沙知代がいなくなったその日からずっと、私は男の弱さを痛感している。

別に自分のことを「強い男だ」なんて思ってはいなかったけれど、それにしても自分がこんなに弱い存在だとはまったく自覚もしていなかった。この年になって、自分の弱さを改めて知るなんて思わなかったよ。

サッチーが強い女だったから、余計にだ。

以前から、「頼むから、オレより先に逝くなよ」と伝えていた。すると、決まって沙知代は「そんなのわからないわよ」と言っていた。

本心を言えば、「絶対にオレの方が先に逝くだろう」と思っていたから、そんな言葉を沙知代に投げかけていたんだ。だからこそ、しばらくの間、私は現実を受け止めることができなかったのだ。……いや、いまだに私は現実を直視できていないのかもしれない。

私は常々、「野村克也－野球＝ゼロ」と言ってきたけど、「野村克也－沙知代＝ゼロ」だと改めて痛感している。野球の世界ではそれなりに実績を残し、「名選手だ」「名将だ」と

おだてられることもあった。
けれど、もしも寝たきりになったら……。
もしも痴呆になったら……。
そんな不安に直面すると、「頼れる者は沙知代しかいなかったんだな」と改めて思い知らされて、不安で不安で仕方がなくなってくるんだ。
やっぱり男は弱い。

サッチーが家にいないってことが辛い。話し相手がいないということが、こんなにこたえるとは思ってもいなかった。
沙知代がいたときも、別に仲良しこよしの会話の絶えない夫婦だったわけではない。むしろ、お互い用向きがなければ会話なんて一切しなかった。
年寄り夫婦はどうやって過ごすのが普通なのだろうか？
毎年、沙知代が好きだったハワイに行くのを別にすれば、二人で遊びに出かけるなんて、私たちはほとんどなかった。人生の余りのような、オマケのような時間。仕事に忙殺されていた昔とは違って今は時間に余裕がある。

長く訪れた暇は、お互いテレビを観ることで消化していた。それも一台のテレビを一緒に眺めるわけではない。私はリビングで、サッチーはダイニングで、別々にテレビを観ていた。同じ番組だったとしても、違うテレビで観ていたのだ。家庭内別居だよ。

こう言うと、離婚寸前だったように思われるかもしれないけど、別に危機的状況にあったわけじゃない。少しずつ仕事が減っていくにつれて、ただ自然と会話の必要性も減っていただけだ。

たいていは夫の仕事がなくなったら妻との時間が増えるものらしいけど、私の仕事は長らく沙知代に監督されていたからな。むしろ、仕事があるときの方が妻との時間は多かった。常に沙知代に監視、監督されていたんだね。

監督を監督していたんだ。すごい仕事をしていたよ、サッチーは。

私からすれば、サッチーの夫をしていた私の方がよっぽど大変ですごい仕事をしていたと言いたいところだけど、世間から見れば「監督の監督をしていたサッチーの方が立派だ」となるんだろうね。仕方ないよね。

仕事がなくなれば、ぽっかり空いた時間を夫婦で使わなければならない。

妻に愛を注ぎたかった夫、夫との触れあいを求めていた妻にとっては、晩年は人生にと

って有意義な期間なのかもしれない。

けれど、私にはそんなことを考える夫や妻がいることがあまり信じられないな。歳を重ねていくほど仲を深めていく夫婦か……。

なるほどそれは美しい理想の夫婦なのかもしれない。どこかにそんな夫婦がいることにはいるのだろうが、長年連れ添った相手だ。今さら「もっと仲睦まじくしたい」なんて思わない人がほとんどじゃないのかな？　せいぜい、子どもや孫をかわいがったり、ペットを飼うのが関の山だよ。

うちでも犬を飼っていた。犬は愛情を注げば注ぐだけ、それに応えてくれる。変な選手よりもよっぽど頭がいい。うちの女房はドーベルマンのような猛犬だったけどね。

愛犬は半年前に死んでしまった。だから本当に今は独りだ。やもめ暮らしだよ。

確かに、仕事が少なくなった分、私も夫婦の時間を作りたいと思えば作れたのかもしれないけど、そんなことは考えもしなかったな。

夫婦がそこで時間を消化することが耐えられないとなれば、熟年離婚に至るわけだ。でも私も沙知代も、仕事がなくなったときには熟年離婚なんて年齢もとうに過ぎ去っていたから。離婚するにもエネルギーがいるもんだ。私にも沙知代にも、もうそんなエネルギー

はなかったのかもしれない。

まぁ、私は離婚なんて一度も考えたことなかったけれどね。耐えてみせたよ。

町でいちばんの極貧家庭に生まれて……

沙知代がいなくなってから、男の弱さを痛感する毎日が続いている。けれども、よくよく考えてみれば私の弱さは、何も今になって始まったことではないことに気がついた。

ここまでの人生を振り返れば、私は常に弱かった。

町でいちばんの極貧家庭に育った幼少期も、いじめや登校拒否に悩んだ小学生時代も、ようやくプロ野球選手になった若手時代も、世間から注目される選手となった全盛期も、周囲から、「監督、監督」とおだてられていた指導者時代も、私はいつも弱かった。

沙知代以外の他人に弱みを見せることはしなかったから、周りの人は気づいていたのかどうかはわからない。でも、私自身の胸の内を静かにのぞいてみれば、そこには常に「弱さ」があり、弱気な自分との闘いがあった。

私が初めて自分の「弱さ」を実感したのはいつのことだろう？

記憶にあるのは小学生の頃かな？　私は丹後半島の西部、日本海に面した京都府竹野郡網野町（現在の京丹後市）で生まれ育った。「京都の奥座敷」と呼ばれているところだった。

私が3歳のときに、父・要市は中国戦線で死亡した。昭和13年のことだった。

私の家は食料品店を営んでいた。父の名前から「野要食料品店」という屋号だった。父が出征してからは母・ふみが店を仕切り、叔母さんに手伝ってもらいながら、何とか生計を立てていたという。他人事のような言い方になってしまうが、私はまだ物心がつく前だったから、母が一生懸命働いている姿がわずかに記憶に残っている程度なのだ。

私が小学校2年生のときに、母は子宮がんを患った。

医療体制が今とは比べ物にならない戦前において、よく無事に助かったものだと思う。母は看護師だったので、不正出血にピンと来たために、早めの発見で命を取り留めたのだと後に知った。

さらに、私が小学校3年生のときには直腸のがんが見つかった。

父が亡くなり、母が病気がちだったため野要食料品店は休業するしかなかった。

そして小学校4年のときに終戦を迎えた。日本中が貧しい時代だった。しかし、そんな時代においても、わが家はさらに貧しかった。

白いコメなど食べられるはずもない。かろうじて自宅近くの海辺の砂地にサツマイモやジャガイモを植えて、空腹をしのぐ日々だった。

お金もない、食べるものもない。それに私は勉強も苦手だった。3歳上の兄・嘉明は対照的に勉強がよくできただけに、私の中にはいつも卑屈な思いが募っていった。

気がつけば私の胸の内の劣等感は、どんどんどんどん肥大化していったのだ。決して自慢できることではないけれど、私の家が町いちばんの貧乏だったのは間違いない。

イジメ、そして登校拒否の小学生時代

貧乏であることで、小学生時代の私はよくイジメられた。

私よりも身体の大きなガキ大将とその仲間たちは、いつも私を学校の校門で待ち伏せて、私の着ているボロボロの服のこと、粗末な弁当のこと、そして父がいないことをからかい続けた。教科書やカバンなど、持ち物がなくなったり、隠されたりすることも日常茶飯事だった。

そんな毎日が続いていれば、当然学校に行くのがイヤになってくる。

気がつけば私は学校に行かないこともあった。母は仕事に出ているので、私が昼間自宅

で泣いていることは知らない。誰にも悩みを打ち明けられずに泣いていると、本当に自分が惨めになってくる。

自分の弱さがふがいない。自分で自分のことが嫌いになる。

この頃から、すでに私は自分自身の弱さを自覚していたのだ。

そんな状況にあった私の異変に隣の家のおばさんが気づき、学校に連絡をしてくれた。こうして、担任の先生が迎えに来てくれるようになった。

その先生こそ、私の初恋の相手だった。

当時、先生はまだ19歳の代用教員だった。彼女がイジメっ子たちをやっつけて味方になってくれたので、ようやく学校に行くことができるようになった。

もしもあの先生の存在がなかったら、私はずっと学校に行かなかったかもしれない。

貧乏だからイジメられる——。

この現実は幼い少年にとっては過酷なものだった。父が戦争で亡くなったことも、母が病気がちなことも、そして家が貧乏なことも、私のせいではない。

それにもかかわらず、こうしたことが原因となって私はイジメられた。当然、「貧乏はイ

ヤだ」「絶対に金持ちになってやる」という思いが日に日に大きくなっていく。
金持ちになるために最初に考えたのが流行歌手になることだった。
当時、美空ひばりがデビューしたばかりだった。日本中で「天才歌手だ」と話題になり、レコードも主演映画も大ヒットしていた。単純な子どもだった私はすぐにコーラス部に入部し、初歩の初歩の発声練習に取り組んだ。
歌であれば、身体一つで何とかなるだろう、元手がかからないだろうと思ったからだ。
すぐに才能がないことがわかった。音域が極端に狭く、人と同じように歌うことができないのだ。「人と違う」ということは、ある意味では才能でもある。しかし、私の場合に限って言えば、まったくそれは当てはまらなかった。
友人からのどを潰したら音域が広がると言われ、日本海に向かって大声を張り上げ続けたこともあった。しかし、一向に高い音が出ることはなかった。
次に夢見たのが映画俳優だった。
まだテレビが家庭に普及する以前のこと、映画は娯楽の王様だった。極貧家庭ではあったものの、近所のおじさんが映画館の支配人だったので「入っていいよ」といつもタダで映画を見ることができた。

女優では原節子、山本富士子が好きだった。男優であれば、上原謙、阪東妻三郎、片岡千恵蔵、佐野周二がお気に入りだった。

当時の私は、自分の容姿をまったく考慮に入れることなく、「私も二枚目俳優になろう」と真剣に考えたのだ。映画を見ては、急いで自宅に戻って鏡の前でたった今見たばかりの銀幕のスターたちの表情や仕草を真似してみる。

しかし、いくら単純な私でも、毎日鏡を見ていれば厳しい現実に気がつくことになる。

――いくら努力しても、上原謙にはなれない。

一気に情熱が冷めていくのが自分でもよくわかった。

こうして、次に私が選んだ道が人生を決定することになった。

そう、野球との出会いである。

甲子園とは無縁の無名プレイヤー

コーラス部を辞めた直後、次に選んだのが野球部だった。

元々、運動神経には自信があった。足は速かったし、バスケットボールも、バレーボールも、人並み以上に上手だった。今では誰も信じてくれないだろうけど。

終戦後の日本の国民的娯楽こそ、野球だった。

プロ野球の世界では赤バットの川上哲治、青バットの大下弘がスターだった。それは、私たち田舎の子どもたちにとっても同様だった。

さらに、大友工というアンダースロー投手が大好きだった。大友さんは兵庫県の出石（現在の豊岡市）という、私の地元から車で30分ほどのところの出身なのだ。

私はまだプロ入り前の大友さんのピッチングを生で見たことがあった。地元から誕生したプロ野球選手ということで、私は川上さんに加えて大友さんのファンになった。

また、私が高校で野球に夢中になっていた頃、読売ジャイアンツは51年から53年まで3年連続日本一となっている。強いチームに憧れるのは若者の特徴かもしれない。

私もご多分に漏れず大の巨人ファンとなり、中でも川上選手に魅了された。指導者らしきものもいなかったから、「いつかオレもプロ野球選手になるんだ」と、見よう見まねでがむしゃらにバットを振り続けた。

野球には本当に夢中になったな。

野球をやっている間だけは、自分の中の「弱さ」と向き合うこともなかったからだね。中学2年で野球部に入った頃、ユニフォームを買う金なんてないから、一人だけランニン

グシャツでプレーをした。それでも、試合で活躍すればそんなことも気にならなかった。
当時の写真が残っているよ。ユニフォーム姿で並ぶチームメイトたちの中で、私だけがランニングシャツに短パンだ。
中学3年になると、「お前は成績が悪いから中学を卒業したら就職しろ」と母に言われた。中卒じゃプロ野球界は目指せない。もちろん不可能ってわけじゃないけど、高校野球で活躍してからっていうのがプロ野球へのキャリアアップの常道だもの。
ショックだったよね。プロ野球選手になるのは、「母親にラクをさせたい」という純粋な思いからなのに、その道を母本人に閉ざされるわけだから。
中卒で働いたってどうしたって金持ちにはなれないよ。金持ちになるためにはプロ野球選手になるしかない。そう思っていたのに。
母には反対されたけど、兄の勧めもあって高校に進学することを許された。
すべて兄のおかげだった。当時、兄貴は高校3年生。私とは正反対で、勉強が趣味みたいな兄貴だった。「そんなに勉強ばっかりやってて楽しいか？」と聞いたら、「楽しいよ」と答えてくる。そういう性格だった。
「今どき、高校くらいは出ておかないと苦労するから」と、兄は私を高校へ行かせるよう

に母を説得してくれた。
まあ、完全な方便だけど。私が「プロ野球選手になりたい」と考えていることを知っていたから、味方になってくれたんだね。就職するなら高校は出ておかないといけないってのもその通りだったけど。
もちろん母は渋ったよ。
けれど、「高校を卒業したらオレが就職するから、代わりにこいつを高校に行かせてやってくれ」と兄はダメ押ししてくれたんだ。本心では大学へ行きたかったらしい。けれど、兄貴はそれを諦めて「オレが働く」と言ってくれた。
それでようやく母は折れてくれたんだね。こうして私は高校に通うことになった。
だから兄貴がいなかったら、プロ野球選手になれなかったんだよ。
兄貴にはどれだけ感謝してもし足りないほどだよね。
大学進学を諦めた兄に応えるためにも、絶対にプロ野球選手にならないといけないって一層決意を固めることとなったんだよね。

進学したのは、峰山高校の工業化学科。これも兄貴の勧めだよ。

兄も峰山高校の出身だったから、工業化学科の野球部員が社会人野球のカネボウ（鐘淵紡績）の野球部に何人か入っていたことを知っていた。そういうルートがあるから工業化学科がいいんじゃないかって。

結果的に小学校、中学校、高校とすべてが兄の出身校と同じだったから、まぁ比べられることは多かった。母親にも、学校の先生にも、「兄貴は優秀なのに」って。

私には父親はいないけど、兄が父親の代わりになってくれていた。

プロ野球選手になってから、兄貴に聞いたことがある。

「兄貴は本当にオレがプロ野球選手になる素質があると思っていたのか？」って。

すると、兄貴は「才能はあるとは思っていたけど、本当にプロ野球選手になるとは思ってなかった」って言ってた。

そりゃ、そうだよね。よくそれで、自分の道を諦めてくれたよ。

高校進学後も、野球を続けた。

決して強豪校ではなかったので甲子園出場なんて夢のまた夢だった。

それでも、当時の私は「プロ野球選手になって、絶対に貧乏から抜け出すんだ」という

揺るぎない信念を抱いていたんだね。

「蜘蛛の糸」をつかんで合格した南海ホークス

結局、甲子園に行くことはできず、プロ野球チームから注目されるような選手にはなれなかった。世間から見れば甲子園とは無縁の高校の単なる無名選手でしかなかったけれど、「もう貧乏はこりごりだ」という思いはますます強くなる。

当時私は、「少しでも家計の足しになれば」という理由で新聞配達をしていた。

ある日、たまたま南海ホークス（現・福岡ソフトバンクホークス）の入団テストの告知記事を見つけた。それ以前から、各チームのメンバー表を手に入れ、自分の実力とレギュラーキャッチャーの能力や年齢を比較し、「試合に出るチャンスがあるとすれば、広島カープ（現・広島東洋カープ）か南海ホークスだな」と狙いをつけていた。

まさに、渡りに船だった。

野球部の先生にそのことを伝えたら、「お前ならひょっとすると受かるかもしれない」と言ってくれた。そして、「大阪まで行く汽車賃がないんです……」って嘆いたら、「そんなものオレが出してやるよ」と気前よくお金まで出してくれた。

ありがたい話だよ、本当に。

受かる自信があったわけではまったくないけれど、３００人以上が受験した中で、私は運よく合格した。確か、ピッチャー1名、外野手2名、キャッチャーは4名だった。

合格できたのは私の実力があったからではなかった。テスト当日、一本の「蜘蛛の糸」が私の目の前に垂れ下がり、それを見事につかんだからだった。

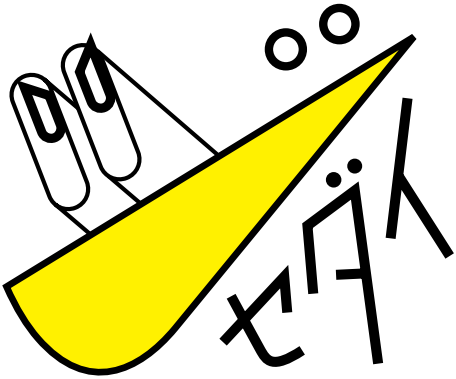
私は遠投テストに自信がなかった。やはり、一投目は失敗し、合格ラインに届かなかった。ところが、第二投の直前、先輩が「もっと前に行け」とささやいたのだ。言われた通りに私は白線の5メートルほど前から投げてみた。

それでようやく合格ラインを越えることになったのだ。

後で知ったのだが、そのとき私に「蜘蛛の糸」を垂らしてくれたのは1年先輩の内野手・河知治さんだった。彼もまたテスト生出身の選手だったのだ。

人間の縁、運はどこに転がっているのかわからない。たまたま、それに気づくことができれば幸せをつかむことができるのだろう。

こうして、私は念願のプロ野球選手となったのだった。



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!